

コリント人への手紙第一10章 「キリスト者と偶像礼拝」

1A 倒れる恐れ 1-13

1B バプテスマ後の滅び 1-5

2B 悪の貪り 6-10

3B 世の終わりの試練 11-13

2A 悪霊との交わり 14-22

1B 一つになる食事 14-18

2B 主のねたみ 19-22

3A 市場に売っている肉 23-33

1B 他の人の利益 23-24

2B 他の人の良心 25-29

3B 神の栄光 31-33

本文

コリント人への手紙第一 10 章を開いてください。パウロは、8 章において偶像の宮で、偶像に献げた肉を食べている人々が、教会の中にいたことの問題を取り上げています。彼らの持っている信条は、「自由」でした。キリストにあって何でも許されるのだ、自分の願い、自分の思うことを自由に行うことがすばらしいと思っていました。それで、偶像に献げる肉を食べたところで、神々と呼ばれているものは存在しないし、肉は肉なのだから、何の問題もないと彼らはしていたのです。

それでパウロは、福音宣教の働き手であるのに、物質的な報酬を受ける自由と権利があるのに、それを行行使しなかった自分たちのことを話しています。キリストにある自由とは、愛のゆえに、福音にある神の救いのゆえに、あえて自分が当然持っている力や権利を用いないという選択ができることです。

こういう話をしている中で、パウロは、信仰の歩みは競技をしている選手のようにであると話しました。自分がキリスト者として、どこまで自由に何かをすることが許されているのか？という姿は、まるで重い登山靴を履いて競走してもいいのですか？と尋ねているようなものだということです。賞を得るために走っているのですから、自らそういった重荷は打ち捨てるはずです。そしてパウロは、そういった競走や競技の中でも、失格になることがあることを話しています。例えば、現代のオリンピック大会であれば、ドーピングをしていたら賞を獲得してもそれが剥奪されます。同じように、自分のからだに働く欲望に支配されてしまったら失格者になるので、自分のからだを打ちたたいてでも服従させている話をしています。

10 章は、ここの、からだに働く肉の欲望についての問題を話します。からだの欲することをそのまま貪るのであれば、競技において失格者になってしまうのだよとパウロは、警告を与えています。

1A 倒れる恐れ 1-13

1B バプテスマ後の滅び 1-5

¹ 兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通って行きました。² そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、³ みな、同じ霊的な食べ物を食べ、⁴ みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。

パウロは、コリントにいる教会の人びとを、「兄弟たち」と呼び、愛をもって警告しています。愛しているからこそ警告し、戒めることがありますね。そして、「あなたがたには知らずにいてほしくありません。」と言っています。彼らは自分たちに知識があると誇っていましたが、それはむしろ、知るべきほどのことも知らないことを表しているだけで、霊的な知識をまだまだ持っていないことが分かります。何度となく、手紙の中でパウロは、「あなたがたは知らないのですか」と問いかけています。ここでは、知らずにいてほしくないのですと言っています。

それは、「**私たちの先祖**」つまり、パウロはユダヤ人ですから、イスラエルの先祖たちが通ったことは、キリストにあって私たちが御霊によって通っているところなのだよ、ということです。前回の説教でお話しましたが、イスラエルがエジプトで奴隷になっていたということは、人々がこの世において罪の奴隷になっていることを示していました。そこから出ていくということは、世から救い出されて、罪から解放されることを意味しています。

イスラエルの民が荒野の旅を始めたら、昼は雲の柱が、夜は火の柱が共にありました。そして、分かれた紅海を渡っていきました。これが示しているのは、イスラエルの民が、神の民として、バプテスマを受けたということであります。自分を罪の奴隷として使役する世と、その支配者悪魔が、エジプト軍が水の中に溺れ死んだように、裁かれて、力を失ったということを意味しています。もはや、古い自分たちは過ぎ去ったのです。今は、約束のカナンの地に向かう、新たな歩みが前に供えられているだけです。イスラエルの民が、モーセを預言者と認めて、モーセに与えられた神のことばに基づいて生きていく、運命共同体になりました。それが、「**モーセにつくバプテスマ**」ということです。同じように、十字架につけられ、三日目によみがえられたイエス・キリストにつくバプテスマを、私たちは受けました。

そして、荒野の旅は、飲み物と食べ物をどう得るか？という中での葛藤でした。イスラエルの民は何度なく不平を鳴らしました。けれども、モーセの祈りを主が聞かれて、彼らに水を与え、またマナという食べ物を与えました。それは、主がことばをもって約束され、その約束を信じて彼らが受

け取っていたので、単なる食べ物、飲み物ではなく、それらを通して神が真実であることを知る霊的な食べ物であり、飲み物でもあったと言えます。

パウロはここで、彼らがマナを食べ、水を飲んだ営みは、教会の聖餐式を表していたことを説き明かしています。キリストのからだが砕かれたことを記念して、私たちはパンを裂いて食べます。キリストの血が流されたことを記念して、私たちはぶどう酒を飲みます。モーセが岩を打って、そこから水が出てきましたが、キリストが打たれて、霊のいのちが流れ出たことを示しています。こうやって、イスラエルの出エジプトと荒野の旅は、バプテスマと主の聖餐を予め示していたのです。

パウロは、「みな」という言葉を繰り返していますね。10章、11章で、パウロは、一人一人がキリストにある交わりにおいてみなが一つになっていることを、聖餐式を通して教えています。そして12章では、キリストのからだとして一つになっていることを教えていますね。コリントの人たちは、基本、個人主義でした。自分が良ければよい、という考えです。しかし、私たちの信仰はそうではありません。自分自身が神を信じるという意味では個人の信仰ですが、その同じ信仰によって私たちが一つになっている、という共同体なのです。

⁵しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。

ここが、パウロがコリントの人たちに伝えたい、厳しい事実です。イスラエルの民は、エジプトを出て、主の恵みにあずかる旅をしていたのに、ほとんどの人々が、荒野の中で死んでいきました。約束の地に入れたのは、当時、二十歳以下の若い世代と、それ以上ではヨシュアとカレブだけでした。ですから、コリントの人たちに警告しているのです。彼らは、自分たちはバプテスマを受け、また聖餐にもあずかっているから、それで救いは確かなのだと思っていたのです。けれども、イスラエルも、カナンが約束されながら、そこに至らずに滅んでしまいました。彼らも同じことをしていたら、滅んでしまうのだよという警告です。

ここで、「滅ぶ」ということが救いを失うことなのか？それとも、違う意味なのか？ということは気になると思います。コリントの教会に対して、パウロは、二つの意味の含みを持たせて話しています。一つは、「救われるけれども、天における報いが残されていない」ということです。彼らのことを、「生まれながらの人間(2:14)」とは区別して、「肉に属する人、キリストにある幼子」と呼びました(3:1)。つまり、彼らは救われているのです。手紙の挨拶でも、彼らの救いが確かであることを語りながら、祝福しています。けれども、同時に、肉の行いをしている者は、偶像礼拝や姦淫や酩酊、そしる者など、「神の国を相続することができません(6:9-10)」と断言しています。つまり、彼らは救われているけれども、からだを御霊に従わせておらず、肉の欲望のままにさせても、それでも救われているのだとする教えは、偽りであり、だまされてはいけないということなのです。

そういった意味で、彼らは危険な遊びをしていると言ってよいでしょう。私たちはとにかく、肉の行いをしている人が救われているのか、救われていないのか？という議論をしまいがちです。それは、神のみぞ知る、です。神が救われるのであって、私たちの領域、主権の中にはないのですから。そうではなく、自分は信じてバプテスマを受けて、聖餐にもあずかっているから、それで救いは保障されているのだと思い込んでいることは、危険ですよということです。

先に、エジプトは世を表していると話しました。では、約束の地は何を表しているのか？二つの見方がありますが、一つは、神の国です。終わりの日に、神の国を相続するということです。もう一つあります。それは、御霊にある生活です。ヨルダン川を渡るということは、自分に死に、信仰によって生きることを決断し、自分ではなく、御霊の力によって罪に勝利する生活であるという見方です。約束の地に入っても、戦いがあります。ヨシュアたちは戦いました。ですから、戦いが終わって平和が満ちているところの神の国ではなく、御霊に満たされた生活を表しているということです。この二つの見方のどちらもできると、私は思います。約束の地は神の国を相続することを示しているし、また御国の前味である、御霊にある神の祝福でもあるということです。

したがって、荒野で滅ぶということは、二つの意味合いがあります。一つは、「水のバプテスマを受けて、聖餐にあずかっている、その人が救われていることをそれで保障するものではない。」ということです。約束の地に入れずに、滅んでいくのですから。もう一つは、「信じることによって、与えられた御霊の祝福を味わうことなく、肉にあって滅んでいく。」ということです。肉に属するキリスト者の惨めさを味わう、ということです。いわば、サムソンの人生のようです。彼には主の力が与えられていましたが、肉の欲望に自分の身を任せたので、ついにペリシテ人に捕えられて、悲惨な最期となりました。彼は信じていましたが、肉の欲望によって、自分を滅ぼしてしまったのです。天には入ったと思いますが、最後が惨めでした。

2B 悪の貪り 6-10

⁶ これらのことは、私たちが戒める実例として起こったのです。彼らが貪ったように、私たちが悪を貪ることのないようにするためです。

主は、イスラエルが荒野で大半が滅んでしまったことを、ただイスラエルの民の身に起こったこととしておられるだけではありませんでした。キリストにある者たちを戒めるための実例であったということです。そしてその理由を述べています。滅んでしまったのは、「貪った」からです。肉が食べたい！という、激しい欲望にかられたことがありますが、そのように貪りが、彼らを滅ぼすことになりました。コリントの人たちが、自分の欲するままに自由に生きていることを誇りとしていたので、それに対する戒めとして、私たちの先祖イスラエルの実例があるのだよ、と言っています。

⁷ あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように、偶像礼拝者になってはいけません。聖書には

「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」と書いてあります。

悪への貪りの一つ目は、偶像礼拝です。モーセがシナイ山にいて、神の律法を受けているときに、すでに 40 日が経っていました。イスラエル人はシナイ山のふもとで待っていましたが、モーセが一向に戻ってこないのに、金の子牛を造れとアロンに要求して、彼らは、食べたり飲んだり、また立って戯れました。これは性的な意味も含まれています。偶像礼拝にともなう淫らな行いです。コリントの人たちは、まさに偶像の宮で肉を食べていて、その罪を犯していると言える行為をしていました。

⁸ また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、淫らなことを行うことのないようにしましょう。彼らはそれをして一日に二万三千人が倒れて死にました。

これは、バラムのつまずきです。モアブの王バラクが、バラムに対してイスラエルを呪うように雇いました。ところが、彼は呪いどころか、祝福の預言をしました。そこで、バラムが助言したのです。「モアブ人の娘たちを、イスラエルの宿営に送り込みなさい。イスラエル人の男たちと戯れるようにさせ、そしてモアブの神を拝ませるようにしなさい。」それで、モアブ人の娘たちをイスラエルの宿営に送り込み、そのため、一日に二万三千人のイスラエル人が、淫らな行いによって死んでしまったのです。コリントには、同じ問題がありました。遊女に通う者たちもいたし、近親相姦を犯している男もいました。

⁹ また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、キリストを試みることのないようにしましょう。彼らは蛇によって滅んでいきました。

彼らは、主を試みました。荒野の旅をして四十年目になったときのことで、すでにイスラエルの一世代は荒野で死にました。新しい世代のイスラエル人たちだったのですが、彼らは主を試みたのです。自分の親たちが主に対して文句を言ったように、自分たちも文句を言ってみようではないか。そうすれば、何かまた不思議なことをされるに違いない、と思ったかもしれません。けれども、そのようにして試みたので、主は彼らに蛇を送られました。そして多くの者が蛇によって死にました。同じようにして、コリントの人たちは、自分たちがキリストによってどこまで許されるのか、という限度を試していました。

¹⁰ また、彼らのうちのある人たちがしたように、不平を言うてはいけません。彼らは滅ぼす者によって滅ぼされました。

これはは、コラがモーセとアロンに反抗して、彼の立っている地が割れて、生きたままよみに下った後に起こりました。イスラエルの民は、「モーセとアロンが、主の民を殺した。」とつぶやきました。

すると、イスラエルの宿営で、人々が次々と倒れて死んでいきました。つぶやきによって、滅ぼされてしまったのです。これもまた、コリントの人たちがパウロについて批判をしていたことによって、行っていました。

3B 世の終わりの試練 11-13

¹¹ これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

パウロは、イスラエルの民に起こったことが、世の終わりに臨んでいる自分たちへの教訓であると言っています。コリント人への手紙、いや使徒たちの手紙にはすべて、自分たちの生きている時代が世の終わりであるとしています。これが、私たちの抱くべき時代観です。この時代が、イエス様が再び戻って来られる時なのだということです。

世の終わりには、つまずきが多くなることをイエス様は、何度となく警告されました。「マタ 24:10-11 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。」今、「生きづらさ」ということが世の中でも多く語られますが、信仰者にとっては、さらに生きづらくなっています。思い煩いや惑わしが多くて、まっすぐに信仰を持つことが困難になって来ています。その中で、主が戻られたら、自分が愚かな歩みをしていることを見られて、恥を見ることになるのです。「マタ 24:48-51 しかし彼が悪いしもべで、『主人の帰りは遅くなる』と心の中で思い、49 仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりしているなら、50 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、51 彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ報いを与えます。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。」

¹² ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

ここで大切なのは、「立っていると思う者は」とパウロが言っていることです。「立っている者は気をつけなさい。」ではなく、「立っていると思う者」と言っています。つまり、本当は倒れそうなのに、自分は立っていると思っているのです。ここが大事です。私たちが、自分は大丈夫であると思っているとき、そのときが一番危ないです。自分も同じ過ちを犯してしまうかもしれない、自分も弱い存在だ、ということがわかれば分かるほど、私たちは主の力と知恵に拠り頼みます。

¹³ あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていただきます。

午前礼拝の説教を、後でお聞きください。世の終わりの時はいろいろな試練があります。けれど

も、主にあつて堅く立って生きて行こうとしている者たちには、必ず脱出の道を神が備えておられます。また耐えることのできない試練に遭うように、神はしておられません。必ず、試練から救い出してください。試練に遭わないということではなく、試練に遭うのですが、それでも救われます。

2A 悪霊との交わり 14-22

1B 一つになる食事 14-18

¹⁴ですから、私の愛する者たちよ、偶像礼拝を避けなさい。

パウロは、彼らが偶像に献げた肉を食べていることに対して、「偶像礼拝を避けなさい。」と結論付けています。8章では、神々と言われるものはいない、肉は肉であつて、それ自体が汚れているのではないという知識については、パウロは同意していました。けれども、兄弟をつまずかせているので、それがキリストに対する罪であると論じていました。しかし、それだけの問題ではなかったのです。彼らのしていること、偶像の宮の肉を食べていることは、偶像礼拝そのものであるとここで断じています。

しばしば、仏式の葬儀において焼香をたくこと、遺影に礼をして祈ること、お墓にお線香を立てて手を合わせることなど、これらは、単なる煙であり、単なる写真であり、それには意味がないから、それらを行なうとする自由な考えの人々がいますが、私は、ここ10章にあるパウロの説明によって、間違っていると思います。神や仏と呼ばれるものはいないという知識は正しいのです。けれども、神々に献げること、死んだ霊に仕えることが、大きな問題を持っていることを次から、「食べること」「交わること」を中心にして、説き明かします。

¹⁵私は賢い人たちに話すように話します。私の言うことを判断してください。¹⁶私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。¹⁷パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。

再び、聖餐のことについてパウロは語っています。コリントの教会においては、私たちの考える聖餐式よりも、もっとユダヤ教の原点に近いかたちで主の晩餐を守っていた様子が伺えます。イエス様は、死に渡される最後の夜、過越の食事の中で、ご自身のからだをご自身の血を覚えなさいと言われたのですが、その過越の食事がある程度、再現していたのかもしれませんが、ここで、「神をほめたたえる賛美の杯」とあります。過越の食事において、杯を合計四杯飲みます。それぞれの杯を飲んで、そして神をほめたたえていました。その三番目の杯は「贖いの杯」と呼ばれて、その時にイエス様が、「これが、あなたがたのために流される新しい契約の血です。」と言われました。

ここで、パンと血にあずかることは、キリストのからだと血にあずかることであることを意味してい

ますね。キリストと霊において交わるのです。これは、単なる象徴的な儀式だけではなく、主がおられて、私たちと深く交わってくださる厳粛な時です。そして、もう一つの意義は、互いに一つになるということです。キリストにあって一つになったら、キリストにある者たちもまた、その血とからだによって一つになります。食事をする時に、当時の人たちは、同じ食べ物を体内に入れることによって、互いに一つになるということを神秘的に体験しているとしていました。それが、起こっているのです。これは、強調しすぎることはありません。バプテスマが悔い改めと信仰にとって、欠かすことのできないものであるように、聖餐は、キリストとの交わりと互いの交わりにとって、欠かすことのできないものです。

¹⁸ 肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。ささげ物を食する者は、祭壇の交わりにあずかることになるのではありませんか。

イスラエルの民も、いけにえについては、自分たちの献げる牛や羊の肉の一部を自分たちが食べます。神が受取り、自分も食べます。それで、神と交わりができるのです。

このように、聖餐においても、祭壇のいけにえについても、食べるということが、神と一つになり、互いに一つになるという非常に大切な意味を持つのです。

2B 主のねたみ 19-22

¹⁹ 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。²⁰むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

ここのことを話すために、パウロは、主の晩餐とイスラエルの祭壇を話しました。聖餐によって、私たちが霊においてキリストと交わり、また互いに交わっているのと同じように、偶像の宮で肉を食べているというのは、偶像そのものは金銀、あるいは木や石でできたものですから、何の意味もないのですが、その行為の中で働いている悪霊に献げているということなのです。偶像の神といっても、その神々はいません。けれども、神以外の神々と言われるものを拝む時に、そこに悪霊が働き、悪霊と交わっていることになるのです。この霊的な実際について、コリントの人たちは完全に無知でした。ですから、先ほど仏式の葬儀や、その他の異教の儀式において、直接的な礼拝行為や祈りや献げる行為について、それを避ける理由がここに 있습니다。神ではないものを礼拝することによって、そこに悪霊が働くのです。

²¹ あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。²² それとも、私たちは主のねたみを引き起こす

つもりなのですか。私たちは主よりも強い者なのですか。

自分たちは、そんな、偶像礼拝をしているつもりはありません。主をきちんとあがめています。ほら、ちゃんとバプテスマを受けたし、また聖餐にもあずかっているのではないですか、と、コリントの人たちは反論するかもしれません。けれども、なおさらのこと悪いことなのです。自分が主と交わっていて、かつ悪霊と交わっていることになります。詩篇の著者はこう言っています。「詩 106:36-38 その偶像に仕えた。それが彼らにとって罫となった。37 彼らは自分たちの息子と娘を悪霊へのいけにえとして献げ 38 咎なき者の血を流した。彼らの息子や娘たちの血それをカナンの偶像のいけにえとした。こうしてその国土は血で汚された。」これは、霊的な姦淫の行為なのです。イスラエルが、ケモシュなどの偶像に献げたことについて、だから、主の妬みを引き起こすのです。主が御怒りを示されるのです。イスラエルは、神の御怒りのために滅ぼされました。自分たちが、その御怒りに耐えうるほど強いのですか？とパウロは聞いています。

つまり、これは6章で私たちが取り扱った、淫らな行いの問題と同じなのです。遊女のところに行っているという問題があつて、遊女と交わるということは、主と遊女を、自分のからだを介して一つにすることなのだと、そんなことは絶対にあつてはならないとパウロは話しました。「6:15-17 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取つて、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあつてはなりません。16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。」偶像礼拝は、肉体の交わりはないですが、霊の交わりにおいて、主に對して姦淫を犯しているということでもあります。

3A 市場に売っている肉 23-33

ここまでは、偶像の宮で肉を食べることについてでありました。そこで次に、市場で売られている肉はどうなのか？という問いに、パウロは答えます。市場で売られている肉の多くが、まず偶像に供えてから売られているからです。

異教の強い社会では、このように、どちらとも言えない、何とも言えない領域が生活の中で広がっています。直接の偶像礼拝行為でなくとも、その影響が確かにあるであろうというものが広がっています。お店に行けば、そこに神棚があることがよくありますね。何か雑誌を買えば、そこに占いのコーナーがあつたりします。そういった時の原則を、パウロは教えてくれます。

1B 他の人の利益 23-24

²³「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。²⁴ だ

れでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。

この「すべてのことが許されている」が、コリントの人たちが好んで使っていた言葉だったと思われます。パウロは、それに対して既に6章、淫らな行いを取り扱った時に応答しました。「6:12 「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」すべてのことが益になるのではない、というのは、目標を目指している時に益になるのではない、という意味だということ学びました。競走をしていることに喩えているので、分かりやすいです。

そして、6章では、「私はどんなことにも支配されはしません。」と言いましたが、ここ10章23節には、「すべてのことが人を育てるとはかぎりません」と言っています。ここが10章でパウロが強調したいことです。知識は人を高ぶらせるが、愛は人を育てると8章で教えていましたが、そのことです。その時にパウロの考えているのは、「自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい」ということなのです。自分の自由を求めるのではなく、他の人の益になること、そうした愛こそが大事なのであり、その愛のために自由を用いる必要があります。

2B 他人の良心 25-29

²⁵ 市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。²⁶ 地とそこに満ちているものは、主のものだからです。

基本的に、市場においては肉はそのまま買って、主に感謝して食べなさいという教えです。それが偶像に献げた肉なのかどうかを問う必要はないと言っています。知識として、すべてのものが神に感謝できるものであり、それらによって自分を汚すことはないのです。イエス様もそのことを教えられましたね、外から中に入るものは自分を汚さない、排泄物として出ていだけだということです。

²⁷ あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。

信仰のない人であれば、偶像にまず献げて、それから肉を出してくることが十分に考えられます。けれども、それも、いちいち詮索せず、主にあって感謝して食べなさいという教えです。

²⁸ しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。²⁹ 良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、知らせてくれた人の良心です。私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるでしょうか。

ここが、大事になります。汚すのは良心においてのことであり、その一人ひとりの信仰とも関連することです。信者でない人で、「これは偶像に献げた肉です」と言ってから食事を出してきたら、その人は、相手が食べた時にそれはその神に敬意を示してくれた、その人は自分の神を礼拝してくれた、ということになります。けれども、もしその人が、自分がキリスト者であることをして、気遣って、これは偶像に献げたものだとしてきたのかもしれませんが。それでも自分が食べたとしたらどうなるのでしょうか？一貫性がない、ということで、つまりくかもしれません。この人は、自分の信じていることについていい加減なのだと思われるかもしれません。あるいは、「ああキリスト者は食べていいということだ。」ということで、他のキリスト者に偶像に献げた肉を強要するかもしれません。自分の良心というよりも、このように相手の良心のために、食べないで済むのです。

こういうわけで、私は、焼香は単なる煙で無意味だからとか、ご遺族や参列者につまずきを与えないためであるとかいう理由で、その行為に関わることにについて、間違いではないかと私は考えています。キリスト者なのだから、他の宗教には関わらないということを一貫して示すことで、かえって相手の良心に、キリストの証しを立てることができるのです。

³⁰ もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。

食事というのは、感謝して食べるものです。そのことのために、裁かれたり、悪く言われたりする事は、本当に悲しいことです。自分が良かれと思ってやっていること、自由だと思ってやっていることが、神のことでなく、悪く言われる材料にしたくないですね。

3B 神の栄光 31-33

³¹ こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

ここも 6 章の淫らな行いに関わることです。心が神に向いているのならば、体で遊女のところに行ってもいいと思っていた彼らに、「6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」と言いました。自分のからだは自分の自由なのだ、自分のものなのだということではないのです。同じように、自分が食べることも飲むことは、自分の自由だからという領域ではないのです。キリスト者にとって、それはある意味で礼拝行為です。感謝して、食べるのです。交わりのいけにえのようにみなすのです。すべてにおいて、それが主の名によって、神の栄光を表すために行います。

³² ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。³³ 私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。

パウロは、福音のため、福音によって人々が救われるためであるならば、福音以外のことで人々をつまずかせることの愚かさを知っていました。パウロはここで、人々を三種類に分けています。ユダヤ人、ギリシア人、そして神の教会です。ユダヤ人にはユダヤ人の文化があります。ギリシア人にはギリシア人の文化があります。それぞれに合わせます。いや、福音以外のことでつまずかせることがあるならば、それは取り除きます。そして神の教会があります。イエスを信じている者たちの間に一致が必要です。また信仰において弱い人と強い人がいます。兄弟をつまずかせないために愛の配慮をする必要があります。

ですから、あきらかに罪であるかどうかわからない時の原理は、自由ということではなく、多くの人々の益であり、救われるということが益です。そのために、あらゆることを努めているということです。今日、世の流れにおいて、キリスト教会でさえ注意を逸らされることが多くあります。教会が社会的なことや政治的なことに引きずられることがあります。また教会が、人間的なことに引きずられることがあります。しかし焦点はいつもイエス様、そして福音です。